

行動科学の立場からみた読書離れの分析

Why Do People No Longer Read?

An In-Depth Look at this Phenomenon from Behavior-Analysis

中 野 美 雅

Yoshimasa Nakano

(要 約)

「読書離れ」で多くの教育者たちはそれを解決すべく、腐心しており、様々な方策を打ち出しているが、顕著な改善策になっていない。なぜそれらはあまり機能しないのか過去の文献を省みて、その原因分析を行った。その結果、読書行動の出現率を高める操作がなされていない事実を確認し、行動分析学の立場から、読書行動出現率を上昇させるための理論を紹介し、具体的な解決策を提言する。

(キーワード)

読書離れ・オペラント条件付け・行動分析

はじめに

「図書館離れ・読書離れ」が世間の話題になりだして既に久しく、図書館・教育に携わる多くの関係者が頭を痛めながらその改善に腐心している。研究論文も数多く発表されている。それらの多くは、現在の現象（図書館離れ・読書離れ）を分析し、嘆きながらも何とか有効な対策を模索している。しかしながら、「図書館離れ・読書離れ」の短い単語の中に、多くの内容が込められており、携わっている人々の立場によってそれぞれの考えで解釈し、その方策を考えている。図書館は、様々な問題も図書館法 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/005.htm (2008年11月1日現在) や、大学設置基準に付随している図書館設置基準 <http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/univlibguide/univlibstandard1982.html> (図書館設置基準、2008年11月1日現在) に縛られているため解決もかなり難しい部分がある。

今回は、「読書離れ」に焦点を絞りと、その実情と、今後どのように「読書離れ」を改善するか行動分析学の立場から考察する。

文献から見た「図書館離れ」の実態調査と、改善策

実態として

「読書離れ」とは、ここでは「過去に比べ、読書をする人口が減少している現象」と定義する。また何をもって「読書」と言うのであろうか。大辞林を引くと、「本を読むこと」と書かれている。「本」とは何であろうか？ 大辞林を引けば「書物、書籍」としてあり、「書物」を引けば、「本・書籍・図書」と記されている。「書籍」を引けば、「本・書物・図書」とある。「図書」を引けば「書籍・書物・本」とある。堂々巡りである。ここでは、「本」とは、「紙に綴じられている情報の蓄積されたもの」とひとまず定義する。従って、DVDやビデオはひとまず除外する。「読む」を大辞林で引けば、1.「書かれ

た文字を一字ずつ声に出して言う。」 2. 「文字・文章などの表す意味を理解する。」 3. 「図形・グラフや一見無意味な文字連続などの意味することを判断し、理解する。」 4. 「他人の将来のことを推測する。」 5. 「囲碁・将棋で先の手を考えたり、相手の手筋を察知したりする。」 6. 「講談や浪花節を演ずる。」 7. 「『訓む』とも書く) 漢字に訓をあてる」 8. 「数える。特に数を口で唱えながら数える。」の8項目が挙げられている。今回の「読む」はひとまず、1. 2. 3. を採択する。但し、1の「声に出して言う。」の部分は、それも含むが、必ずしも声を出さなくても良いこととする。

従って、「読書」とは、「紙に綴じられている情報を蓄積されたものの文字や図形によって表された意味を理解する。」とひとまず定義する。しかし、この定義と、多くの教育に携わる人々の考えている「読書」とは、若干の開きがあると考えられる。なぜならば、上記の「読書」の定義には、様々な機器のマニュアルや、使用説明書等も含まれる。これらも「読書」に含まれるであろうか？ この議論は、後にするとして、どのような人たちが、どのように「読書離れ」減少に対して危機感を持ち、どのようにそれらを改善していこうとしているか振り返ってみる必要が有ろう。その前に、「読書離れ」はいつ頃からの現象なのか振り返ってみる必要がある。白根恵子 (2003)¹ は「子どもの“読書離れ”の実態とその打開策としてのブックトーク」の中で、読書離れ状態が、最初に社会的な話題となったのは、昭和39年 (1964) としている。これは、全国学校図書館協議会が毎日新聞と協同で1954年から大体毎年行っている「学校読書調査」に基づいている。また、ELNET全国新聞・雑誌記事紙面データベースを検索すると、1980年代から「読書離れ」、「活字離れ」等の記事が散見できる。時代背景的には、高度経済成長期頃であり、様々な技術革新がなされ始めた頃と言えよう。しかしながら、赤木かん子 (1992)² は「“読書離れ”を考える」の中で、「文献を調べていたら、明治20何年かに書かれた教育書に『近頃の青少年は本を読まない』との記述がある。」としている。いずれにしても、「読書をしなくなった」現象は事実のようである。それらに対して、多くの人たちが、現象を捉えたり、分析したり、その方策を提言している。文献を調べてみると、大別して、調査・分析に主眼を置いている文献と、「読書をさせるには」と言った、方法論に主眼を置く文献とに2分されているようである。今回、引用・参考を使用した文献は、20本でそのうち12本は調査・分析であり、何らかの具体的改善策を述べているのは、8本であった。勿論、取り寄せた文献がすべてではなく、これらに関する文献は数多く存在するはずである。分析結果の特徴的な傾向としては、よく読書する者と、全く読書をしない者の二極化現象の存在を示している。増田近文 (1992)³ は「読む子と読まない子の両極端化」の中で、上記の学校読書調査の調査結果を踏まえ、読書する子とそうでない子の存在が顕著であるとしている。そして、読んでいない子の理由を問うた時、その理由として「読みたいが読めなかった」と、「読みたいと思わなかった」と答え、「読みたいが読めなかった」の理由として、「読みたい本が無かった」と「読みたいが時間が無かった」の二つに集約されたと述べている。「子どもにとって適書とは、そして、子どもの読みたい本とはどのようなものかを考えなければならない。」と問題を提起している。そして最後に、「読書離れと言っても、それはすべての子ども達を同一視できる問題ではなく、部分的な読書離れであり、読まない層は何処にあり、それをどう指導するかと言う細かな面から読書離れを考えるべきであろう。」と結んでいる。また、「一方、よく読んでいる層についても、別の点から問題がある。それは、『軽読書化』と呼ばれる読

行動分析の立場からみた読書離れの分析

書の仕方や質の問題がある。」と指摘し、更に「少数の熱心な教師を除いてどれだけ一般の教育現場で読書指導が行われているだろうか疑問である。『本など読んでいたのでは、、、』という風潮が教育現場にあり、読書指導の軽視・読書指導の不在が今尚見られるのではないか。」と述べて終了している。

二極分化の問題は、秋田喜代美・武藤隆（1992）⁴も「小・中学生に対する考え方、感情の発達の検討—読書量に影響を与える心理的要因—」の中でも指摘している。その中で、二極分化の原因に対し、「読書に対して、どんな感情を抱いているか、読書を自分にとってどんな意味を持つ行動として認識しているのかと言った読書行動を動機付ける心理的要因に違いがあるのではないか」という問題意識で分析している。そして、読書に対する「意義」に関して、主成分分析を用い、要因を1.「空想・知識」（思考活動に関する意義）、2.「気分転換」、3.「成績・賞賛」の三つに分類し調査を行い、結果として高学年になるにつれ、「3」が減少し、「1」、「2」が増大する結果を得た。これにより、「意義の認識が読書に対する感情を育て、更にそれが読書行動を促す意欲になっていくのである。」と結論付けている。このほかにも、池末孝郎（1992）⁵「意識は変化したが、絶望的ではない—情熱を持って読書の仲間を増やそう—」は、言語の乱れを読書不足としており、活字離れの問題を指摘している。そして、生活時間の中で、意識が変化し、他メディア（映像のテレビ、音声のラジオ）の発達により、読書時間の減少を述べており、読書指導の必要性を説いている。石子順（1992）⁶は「子どもの読書と映像文化（読書離れの背景を探る〈特集〉）」の中でマンガを本とみなすのか、またマンガにも通常のマンガと、学習マンガの存在を指摘している。そして、読み聞かせの重要性を指摘している。今村秀夫（1992）⁷は「子どもの生活時間と読書—『日本人の生活時間』（NHK調査による）」の中で、「読書生活は、人々の日常の全生活という分母の上にある分子であって、その分母の部分をほとんど無視して、その分子たる読書生活だけを問題にしても問題点や解決策は生まれてきにくい。」として、生活全体のありようを分析している。その結果、学業等に縛られ自由時間の減少を指摘している。そして「その自由時間の多くは、レジャー活動とマスメディア接触に費やされている。」と指摘している。活字文化への接触は、「高学年になるにつれ上昇している。」とし、「学業の軽減、重圧から子どもの解放こそが重要である。」としているが、読書に関しては、「二極分化と、本好きとは言えないが、かといって嫌いでもない。」と言う程度で言及をとどめている。1994年11月19日発行の日本教育新聞の記事として、文科省が「子どもを本に近づける10の提言」⁸を行っている。「読書を楽しむためには」として「1. 感動する本の用意、2. 読書の楽しさを紹介、3. 読書を楽しむ心に共感」そして、魅力的な図書館作りとして「5. 子どものオアシス、読書センターに、6. 学校の学習情報センターに、7. 地域に開こう、8. 構内の協力体制」そして、学校・家庭・地域の連携として、「9. 三者で基盤づくり、10. 読書する時間のゆとりを」と言った提言をしている。しかしながら、「感動する本の用意」、「読書の楽しさ」、「読書を楽しむ心に共感」と言った表現は、ある意味当たり前の事であり、また逆に何をもってして「感動」するのか、「楽しさ」とは、あるいは「心の共感」と言った、言葉の定義がなされず終了している。また、浜田重幸（2000）⁹は「データから見た日本人の読書離れ—100万人の調査から—」の中で調査報告に基づき、若者の活字離れ理由のアンケートとして、8つの選択肢を提示した。その回答結果として、「1位は『本よりテレビやビデオ、ゲームの方が楽しいから』80%、2位が『本よりマンガの方が楽しいから』51%、

3位が『受験勉強に忙しいから』30%、4位が『文字ばかりの本はうっとうしいから』27%、5位が『クラブ活動が忙しいから』14%、6位が『親が本を勧めないから』11%であり、意外にも『文字ばかりの本はうっとうしいから』が若者の読書離れの大きな理由の一つになっている。」と報告している。またその中で、幼児期の「読み聞かせ」の重要性を指摘している。森忠繁・千家令子・堂田いづみ(2006)¹⁰は、「学生の読書に関する調査―世論調査との比較―」の中で、大学図書館の利用が少ない点を指摘しているが、調査結果にとどまり、提言等はしていない。2007年4月20日発行の時事通信¹¹「読書離れが加速か」として、読書離れと、本購入費も減少していると指摘している。浅井昭治(2008)¹²は「子どもはどうやって本を読まなくなったのか」の中で、上記の学校読書調査を踏まえ、小学生と中・高校生の読書離れの要因を指摘し、分析をしているが、最後に「不読の問題も様々な角度から究明する必要を痛感する。」と言う課題提言で終了している。室謙二(2008)「インターネット時代の読書」として、「読書」と「テキスト(この場合、教科書の意ではなく『文字テキスト』の意味で用いている)」を読むことの相違を述べ、今後のインターネットでの「テキスト」に関しメディアとしてどのように進化していくかを述べているが、読書離れに関しては言及していない。一方、向井睦子(1991)¹³「読書離れの中学生に働きかける―大阪市立大淀中学校―」の中で、「読書能力を高めることは、どの教科・領域にとっても重要な課題である。」とし、「その中でも国語科での指導、図書館を通じての指導が中心となるだろう。」としている。そして、学生達に対して、1. 図書館活動として、図書館の充実、開館時間の工夫、貸し出し冊数の工夫、2. 学級文庫の充実、3. 国語科での週5時間の授業の1時間を読書指導と書道に充てる。4. 読書活動として、読書時間の確保(授業中に読書できる時間を確保する)、5. 読書コンクール(コンクールにて、個人賞上位3名、クラス上位2名を校長先生から表彰)6. 図書館ニュースにて情報提供および啓蒙する。と言った6項目を挙げ、働きかけをしている。若林千鶴(1992)¹⁴は「図書館と教科の連携であらゆる機会をとらえて指導」の中で、「子ども達は本が好き」と言う信条を前提として、図書館の雰囲気作りから始まり、広報活動と読書案内をビジュアル化し、国語科に関して教科指導と連携し、読書指導を行っている。そして、個人の読書記録を残し、読書の励みにしている。更に「あらゆる機会を捉えて意識的に読書の啓蒙を行っている。」としている。また、三富ゆりこ(1992)¹⁴は「読書時間を設けて読書の習慣化を図る」の中で、「時間を設定し、多様な読書を経験させることによって刺激を常に与え、読む楽しみを味わわせ、読書意欲を高めたいと実践してきた。全職員の協力の重要性を痛感する。」と報告している。作山静男(1988)¹⁵「子どもの読書離れを防ぐには―読書指導―」は、教え子が同職に就き、それに対するお祝いの手紙形式をとっており、イギリスの哲学者ホーソンの言葉を引用し、「読書は完全な人間を造り、談話は起点のきく人間を造り、書くことは正確な人間を造る。」とし、読書指導は色々な考えや説があるとしながら、「読書によって高度な理解力を習得すること、人間性の拡張、獲得した知識・技能・態度の活用等々ですが、最初から気張らずに、それこそ亀村五郎氏の言を借りれば(・・・子ども達の心を揺り動かし、自らの力を使って喜びを得たり、人間らしい生活をしていくための知識を得ることの手助けの一つ)」として、子どもを本好きにするために、感想文に関しては「いちいち書かせたら本離れしていきます。」と否定的でありながら、14項目を挙げている。それは、1. 読み聞かせをする。2. 語り聞かせをする。3. 読書の星取り表の活用。4. 読んだ本の

行動分析の立場からみた読書離れの分析

紹介し合い。5. テレビ・ラジオで放映（放送）された物語の本を勧める。6. 作者への手紙をきっかけとして、7. その子の読書能力に合った本を勧める。8. 学級文庫の充実。9. ブックトークによる指導。10. 朝の会の10分読書。11. 全校読書祭り。12. 「読書クイズ」「読書いろは」等の導入。13. 学級集団読書授業。14. 家庭の読書環境への働きかけ等などである。前述の、白根恵子（2003）¹⁵ は、同報告の中で、読書離れの打開策として、ブックトークを推奨しており、「学校読書調査結果は、テレビ・ビデオゲーム等の手軽な娯楽に加えて塾通い・お稽古事と数多くの阻害要因があっても、“子ども達は面白い本に出会えば読む”と言う事実を示している。逆に言えば、“読書離れ”現象は、多くの子ども達が“面白い本”に出会っていないということを示唆していることになる。」と結論づけ、「教師や父母、ボランティアに惜しめない援助を提供することが大切である。」としている。杉本幹夫（2004）¹⁶ 「青少年の読書離れを防ぐために、印刷業界が積極的にプレゼンを展開」新日本印刷株式会社会長であり、印刷業界からのスタンスで述べている。その中で「雑誌の発行点数は間違いなく減っている。しかし、喫驚の売れ行きを見せているのは、名作、名著の粗筋を紹介する本だ。」と報告している。これは、所謂「軽読書」と言われる本の一つであろう。そして、最後に教育の必要性を説いている。足立幸子（2008）¹⁷ 「読書の魅力を伝える技法ーリテラチャー・サークルー」は、本の魅力を伝える技法として、リテラチャー・サークルを提唱している。様々なバリエーションがあるようだが、手順としては、1. 教師が本を紹介し、2. 子ども達が読みたい本を読んで、グループを作る。3. 子ども達が読む範囲を決め、4. 子ども達が、グループの中での「役割」を決める。5. 子ども達はそれぞれ、自分の担当する「役割」で、決めた範囲を読む。6. 「役割」に基づいて、グループで話し合う。「役割」とは、フィクション系の本の場合として、「どのグループにも置きたい役割として、『コネクター（自分との繋がりを見つける）』、『クエスチョナー（疑問を見つける）』、『リテラリー・ルミナリー（優れた表現などに光を当てる）』、『イラストレーター（目に浮かんだ情景を絵にする）』といったもので、必要であれば加えたい役割として、『サマライザー（要約する）』、『リサーチャー（作者、テーマなどを研究する）』、『ワードウィザード（特別な語を取り上げる）』、『シーン・セッター（場面の特徴を捉える）』の8役割である。」としている。これ以外にも適宜必要とあれば増減する。そして、その後、フランクにディスカッションを行い、「評価は、教師の観察と、子どもの自己評価で行う。」としており、「それらは、1990年代の読書や心理学の理論に基づいている。」としている。効用としては、「自分の知識や見解を広げるための手法として意味があるはずである。」としている。

考察

概観として

大体、このような状況である。まとめると、ここ20年位前から、「図書館離れ・読書離れ」の現象が顕著になり、その打開策は無いかと多くの人々が苦慮している。現象の要因としては、小・中高校生等は、学習時間増加による自由時間の減少、そして、その自由時間でも、メディアの発達による、他の行動に時間を取られる（テレビを見たり、音楽を聴いたり）ことにより、読書に充てる時間の減少などがあげられている。また、顕著な現象として、読書の二極化が観察されている。多読する人々と、不読の

人々の両極化が進行している。また、不読の人々の中では、「読みたいが読めなかった」と「読みたいとは思わなかった。」とに分かれた。更に「読みたいが読めなかった」の回答者では更に、「読みたい本が無かった。」と「読む時間が無かった」とに分かれている。また、どのように「読書離れ」を是正し、「読書」行動を促すかについては、多くの人々は、「ブックトーク」・「読み聞かせ」を挙げている。それ以外にも様々な是正策を提案している。「リテラチャー・サークル」、教育指導（環境整備として図書館の充実、読書祭り、授業中の読書時間の設定、読書後の感想のディスカッション等）の充実、徹底等腐心している。

しかしながら、それぞれの研究者が、それぞれの思惑で試行錯誤をしているが、気になる点が存在する。まず、「読書」と言った時、何をもってして、「読書」したかが、明確になっていない。今回、冒頭で、筆者は、「読書離れ」、「本」、「読書」の定義を行った。これは、議論する中で使用する用語の定義が相手と違っていた時、議論が成立しない状況や誤解を招く可能性があるため、用語の定義は必要であると考えからである。上記の文献の中でも、「本」に関して、マンガを「本」とみなすのか？の議論も存在している。本を読むことを「読書」としているが、読むものが本であれば、すべて読書になるかの議論は全くなされていない。つまり、「読書」に対応する本の定義が曖昧である。これでは、今後、議論を継続することは困難になろう。冒頭でも述べたように、「読書」に入るものは何かを明確にする必要がある。今回、「読書」に入るものとして、アンケートを行った。これは、「読書離れ・図書館離れ」の実態と、後述する行動統制のためのニーズ等を確認するための一環の一つとして行った。記述する内容は、「読書」と言えるものとして、マークをつけてもらう形式で行った。以下の15種類を設定し、複数回答可として実施した。1. 小説、2. 専門書、3. 研究論文、4. 絵本、5. マンガ、6. 学習マンガ、7. パンフレット、8. 一般教養書、9. プログラム、10. 新聞、11. マニュアル（仕様書）、12. 聖書、13. 経典、14. 雑誌、15. その他（ ）とした。方法は印刷したアンケート紙による回答、若しくは、インターネットのホームページにアクセスしてもらい入力してもらった。<http://ts.akira.ne.jp/lank/tanko.htm>（このアンケートは、現在も継続中で有り、修正その他適宜行っているため、内容が変更されている場合があります）。この集計時点では、回答者は48名で、年齢は、19歳～62歳までで、男子18名、女子30名であった。性・年齢分布等は省くとして、結果は図1のごとくとなった。この

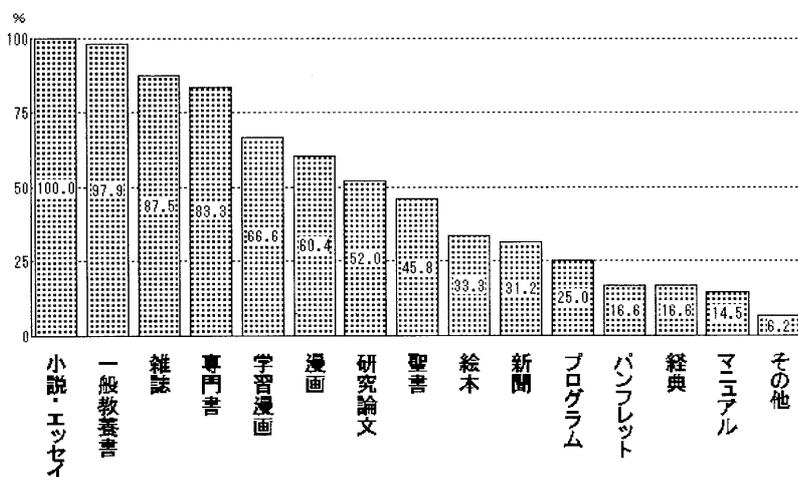


図1. 読書とみなす割合

行動分析の立場からみた読書離れの分析

表示は、各項目に対する回答数をアンケート回答者数で割った値に100を乗じた「%」で表示されており、割合の高い方から並べ替えたものである。その他は3件あり、「案内書、百科事典、白書」が記述されていた。今後の課題である。今回述べたい主旨は、順位とか、どの割合が高いとかの議論ではなく、これだけばらつきが有り、各人により、「読書」の概念が異なるということである。つまり、ある人は、「漫画は読書に入る」と考えており、またある人は「漫画は読書に入らない」と考えている事実が存在するということである。これらの人々が、「読書」の定義をせずに議論を始めたとしたら、議論そのものが噛み合わないであろう。従って、「読書」を議論するには、「読書とは何を意味するか」と言った定義を先に行う必要がある。しかし、文献では、定義が全くなされておらず、各々が恣意的に用語を使用している。

現象としては、様々な統計検証が発表されているため、客観的事実として捉えることができるが、それ以外の問題、つまり、「読書」とか、「読書の価値」など言う場合、厳密な定義が必要となる。それらを明確にして、次への議論が可能となるであろう。

解決の方法論として

現状の問題となっている、「読書離れ」を如何に取り戻すかの方法論的考察を行うわけであるが、「図書館離れ・読書離れ」はともに行動を述べている。

筆者は、短大図書館研究28号¹⁸に、行動分析の立場からそれらの行動を引き出すための提言を行った。「図書館離れ・読書離れ」とは、図書館に「行かない」。あるいは「行っていた行動がなくなった」現象であり、また、「読書離れ」とは、読書行動が「なされない」状況を表現している。短大図書館研究28号でも記したが、図書館に「行く」ようにする、あるいは、読書を「する」行動の出現率を高めることは、それ程難しくない。例えば、「この図書館の色々なところに、10万円の束があります。それを見つけた方は、お持ち帰りいただいて構いません。」と表示すれば、その図書館に「出かける」行動頻度が上昇することは誰でも認めるであろう。また、「読書する」と言う行動の頻度を上昇させるための条件としては、「ある本のどこかに、このフレーズが書かれています。見つけた人には、10万円贈呈します。」として、特定のフレーズを提示すれば、皆、本を読み、そのフレーズを探すであろう。ただ、その行動が促進され、図書館に人が押し寄せる結果になったとしても、あるいは、多くの人が、本を読み始め、「図書館離れ・読書離れ」の現象がそうでなくなったとしても、多くの人は「本来の目的と違う」と感じるであろう。ならば、「本来の目的」に合致した状況に、上記の条件をずらせばよいのである。また、上記の条件自体も、現実離れしているのは当然である。「例えば」として提示しているのである。しかし、この条件であれば、多くの人が図書館へ行き、本を読み、フレーズを探すであろうことは、多くの人は理解できるであろう。これらの条件を提示するのを「確立操作」と言うが、「お金が手に入る」ことは多くの人にとって、ポジティブなことであろう。お金でなくても、本を読んだ人にとってポジティブなものは別にもあるはずである。例えば、小学生などは、教師の賞賛でも良いし、本のプレゼントであっても良い。尊敬する教師の微笑みだけでも充分ポジティブなものになりうる（ただし、ポジティブな「度合」は違うため、それらの精査する必要はある）。図書館へ「行く」ように行動させられるも

のは、お金だけではない。例えば、「浜崎あゆみ」が書司としてある図書館で働くとしたら、多くの人がその図書館に出かけるであろう（浜崎あゆみが嫌いな人は行かないであろうが）。上記の手法は、行動分析学の理論に基づいているのである。

行動分析学の特徴としては、佐藤方哉（2001）¹⁹「ことばと行動」の中で簡潔に述べている。以下は、その引用である。

「行動分析学 (behavior analysis) は、アメリカの行動主義者 B.F.スキナー (B.F.Skinner, 1904-1990) の創始になるものであるが、現代における自然科学ないし実験科学的な心理学のなかにおいて、他とは著しく異なる特徴を持つ独自の体系である。・・・中略・・・行動分析学の特徴は、次の三点に要約することができる。

1. 研究の対象は行動それ自体である。行動を通して心ないし意識や認知あるいは脳の働きなどを研究するのではない。
2. 行動に関する全ての出来事を同一の理論的枠組みとできるだけ少ない共通の原理で分析する。
3. 行動の原理を、個体内部にではなく、個体を取りまく過去および現在の外的環境の中に求める。

注：上記の3点以外にも、行動分析学の方法論的特徴として、実験計画法に群間比較法 (group designs) でなく、単一被験体法 (single-subject designs) を用いること。」

としている。「注」でも述べているが、各個体が問題であり、「群」に注目はしない。これにより、個別指導が重要であると示唆している。行動分析学での「行動」の定義としては、

「行動分析学においては、行動を「個体の営みのうちで外的環境に働きかけあるいは相互干渉をもつすべての営み」と定義する (Skinner, 1938)。このように定義すると、外部から観察可能なものだけが行動ではなく、外部からは観察不可能な私的出来事である意識あるいは認知なども行動である。

行動分析学以外の心理学では、意識や認知は行動とはみなさず、意識や認知が行動の原因となると考える。そして、意識や認知は直接観察することは不可能なので、直接観察可能な行動を通して意識ないし認知と言った心の働きを研究しようというわけである。このような立場は、方法論的行動主義 (methodological behaviorism) とよばれる。方法論的というのは、心理学の対象は、本来、意識あるいは認知と言った心の仕組みと働きであるが、それらは他者が外部から観察することではないので、科学として客観的に研究するためには、外部から観察可能な行動を通して推論するという方法をとらざるをえないとする立場だからである。

行動分析学では、意識や認知をも行動とみなし、それらは行動の原因ではなく、観察可能な他の行動と同様の原理が働いていると考える。上述のように、方法論的行動主義にたつ心理学では、意識や認知は観察不可能であるため観察可能な行動を通して推論される。一方、行動分析学では意識や認知などの私的出来事も他の観察可能な行動と同様の原理にしたがっているため、それらを客観的に研究することができるとする。このような立場を、行動分析学の創始者スキナーは徹底行動主義 (radical behaviorism) と名付け、方法論的行動主義と対比している (Skinner, 1945, 1974)。徹底的と言うのは、心理学の対象は行動そのものであり、意識や認知と言われる私的な出来事も行動

行動分析の立場からみた読書離れの分析

であり、外部から観察可能な行動と同一の原理に従うとする徹底した立場だからである。」

そして、「行動分析学」とは、

「行動分析学とは、文字通り行動を分析する学問である。分析とは、出来事の生じる条件を明らかにすることである。出来事の生じる条件のことを、制御変数 (controlling variables) という。

したがって、行動分析学の目的は、個体の営みのうちで外的環境に働きかけあるいは相互干渉をもつ営みとしての行動の制御変数を、個体の内部ではなく外的環境に同定することにある。その哲学背景に徹底的行動主義がある。」

としている。そして、それらの中で使用される術語の説明として、

「オペラント行動 (operant behavior) とは、その行動の生じた直後の環境の変化 (刺激の出現もしくは消失) に応じて、その後その行動の生じる頻度が変化する行動である。オペラント行動には通常それを引き起こす (elicit) 生得的な刺激 (無条件誘発刺激) は存在しない。オペラント行動は、個体が自発する (emit) 行動である。

オペラント条件づけ (operant conditioning) とは、オペラント行動が、それが自発された直後の環境の変化に応じて、その後の自発頻度が変化するを言う。

行動随伴性 (behavioral contingency) とは、オペラント行動とそれが自発された直後の環境の変化を言う。

強化 (reinforcement) とは、直前のオペラント行動の自発頻度を高める環境の変化をいう。強化をもたらす環境の変化は、通常、個体の生存にとって望ましい出来事である。」と定義付けている。

そして、行動分析学の特徴として、

「行動分析学の特徴は、行動を行動随伴性の枠組みで分析することにある。物理的に同じ形態や特性を持った行動も、それを制御する行動随伴性が異なれば異なる行動である。例えば、同じ両手を擦り合わせるという行動も、水を流して手の汚れが取れる場合と、寒空で手が温まる場合とでは、行動随伴性が異なるので同じ行動ではなく、異なる行動である。」と述べている。

この枠組みで、「図書館離れ・読書離れ」を行動と捉え、読書行動を自発させるには、読書行動が自発された時、即座にその個体にとってポジティブなものを与えるのが最良の方法であり、その結果、行動の出現率が上昇するのである。多くの文献は、環境整備をすることに主眼をおいている。これらは、behavior-altering effect (行動増進効果) ではあるが、直接的な強化随伴性にはなっていない。従って、別の行動を強化する可能性もある。例えば、図書館の環境整備などは、その環境が良くなった事で、高校生のデートの場として使用されるかもしれない。「読み聞かせ」などは、「読み手」とのコミュニケーションを強化するかも知れない。

「読書」を強化したい場合、先に述べた、「読書」の定義が問題になるのである。本を読みさえするのがよければ、前述した操作で本を読むようになるであろう。「読書」の定義を明確にして、その行動、例えば、読書内容で感動したとした行動が出現した直後に、強化 (その個体にとってポジティブな何物かを即座に与える) すれば、その直前の行動の出現頻度は高くなるであろう。「即座」と言うのは、その行動が生じた正に「直後」である。「直後」に強化を行うのはかなり困難な場合もある。しかし

ながら、我々は言語を使用している。言語によって、遅延させることは、「報告言語行動（タクト）」として可能となり、時間を越えてオペラント行動を自発させることができるようになる。その行動を「ルール支配行動」と名付けている。そしてそのオペラント行動を強化すればよい。このことを佐藤方哉は「ことばと行動」の中で、下記のごとく述べている。

「報告言語行動（タクト）と言う言語行動により、時空を越えた環境における事物、出来事、状況などの記述が可能となる。報告言語行動（タクト）により行動随伴性を記述することもできる。行動随伴性を記述した公告言語行動（タクト）が弁別刺激として機能するとき、それをルール（rule）と言う。たとえば、ある人が「行動分析学がことばの問題をどのように扱っているかは、『ことばと行動』を読むと良く分かりますよ。」と報告言語行動（タクト）をしたとしよう。この報告言語行動（タクト）は、＜行動分析学における言語の取り扱いを知りたいければ、『ことばと行動』を読めば、それがよくわかる＞と言う行動随伴性を述べている。この報告言語行動（タクト）を聞いた、読んだりした人は、それが弁別刺激としてのルールとして機能することによって、『ことばと行動』を読むというオペラント行動を自発することができる。このようにルールを弁別刺激として自発するオペラント行動をルール支配行動（rule-governed behavior）という。ルール支配行動がなければ、すべてのオペラント行動は直接なんらかの行動随伴性に形成、維持されている。このような通常のオペラント行動を随伴性形成行動（contingency-shaped behavior）という。言語行動を身につけていないヒト以外の動物のオペラント行動は、すべて随伴性形成行動である。」

先に述べた、「この図書館の中に、、、」あるいは、「この本の中に、、、」と言うのはこれにあたる。

まず、「読書」とは何かを明確に定義し、その行動が自発されたら、それらの行動に対して、何らかの強化を与える必要があるのである。そのためにも、「読書」行動を明確に定義しなければならない。逆に言えば、明確に定義された行動に対して強化を行うことが、その行動の出現率を高める方法である。

二極分化現象に関して、多読をする者たちは、読書行動の直後に生得性強化子が存在すると考える。生得性強化子とは、生まれながらにしてその個体にとって「ポジティブ」なものである。のどが渇いたときの水、空腹時の食料などであるが、「好奇心・感動」などもそれに入る。一方、「お金」などは、習得性強化子であり、学習によって獲得された強化子である。「お金」は、それ自体はそれ程の強化力を持たないが、それが「生得性強化子と交換できるもの」として機能するため、非常に強い強化子となっている。また、巷では、ポイント制とか、マイレージ制を導入しているが、これもただ、ポイントが増えるだけでは強化子としての機能は持たない。あるポイントに達すれば、金銭や自分の欲しいものと交換できることによって、強化子となるのである。札束をいくら持っていたとしても、それが自分の欲しい物と交換できなければ、誰もお札を集めようとはしなくなる。話を戻し、二極分化の他読者達は、読書することにより、生得性強化子（感動・面白さ・様々な興味ある知識など）が行動内在的随伴性として機能するため、他者が強化を与えなくても、自ら強化を与えているため、その行動の持続が可能となっているのである。不読の者達も他者が強化手続きを行い、上記の状況まで導けば、その後は自らがその行動の維持をしていくようになる。これは読書中毒と言う範中に入るかも知れないが。

行動分析の立場からみた読書離れの分析

まとめ

「読書離れ」を改善するには、まず、事象の定義を明確にする必要がある。次いで、客観的事実を明確にしなければならない。環境整備も必要ではあるが、それは直接読書行動には繋がらないことを理解する必要がある。また、読書をするのは「個体」であるから、まず、個体に注目する必要がある。そして、その個体の読書行動のベースを確認して、読書行動の中で好ましい行動が生じた場合強化を与える。その後、その行動の出現率が上昇すれば、その強化が強化子として機能した事になる。その時、強化子の持つバリュー（価値・強さ）を検証しておく必要がある。それを繰り返していけば、生得性強化子が行動内制的随伴性として機能するようになり、自ら読書行動を持続していくのである。

文献の中に星取り競争やコンクールなどの記述があるが、これらは、その行動を促進する事になる可能性は高いが、星取り競争の場合は、達成欲求の強い者には良いかもしれないが、時として、嫌悪刺激になる可能性もある。コンクールなどは、上位何名かにしか強化が与えられない。これが続くと、上位に常に入っている者達は強化を受けてその行動は促進されるであろうが、そうでない者達には強化刺激とはならず、むしろ嫌悪刺激として機能する可能性もあるので気をつけなければならない。いずれにしても、行動理論に則った強化条件付けを行うことにより、かなりの改善が可能と考えられる。

引用文献

- 1 白根恵子「子どもの“読書離れ”の実態とその打開策としてのブックトーク」佐賀女子短期大学研究紀要 Vol.37,pp.19～23 2003.
- 2 赤木かん子「“読書離れ”を考える－児童文化の視点から（読書離れに打つ手はないか〈特集〉）－（子どもたちの読書離れを考える）」全国学校図書館協議会（通号499）pp.p 9～12 1992/05.
- 3 増田近文「読む子と読まない子の両極端化－読書調査の視点から（読書離れに打つ手はないか〈特集〉）－（子どもたちの読書離れを考える）」全国学校図書館協議会（通号499）pp.p20～24 1992/05.
- 4 秋田喜代美・武藤隆「小・中学生の読書に対する考え方－感情発達の検討－」全国学校図書館協議会（通号506）pp.p29～35 1992
- 5 池末孝郎「意識は変化したが見えない絶望的ではない－学校図書館の視点から（読書離れに打つ手はないか〈特集〉）－（子どもたちの読書離れを考える）」全国学校図書館協議会（通号499）pp.p13～19 1992/05
- 6 石子 順「子どもの読書と映像文化（読書離れの背景を探る〈特集〉）」全国学校図書館協議会（通号506）pp.p10～16 1992/12
- 7 今村秀夫「子どもの生活時間と読書－日本人の生活時間（NHK調査）による（読書離れの背景を探る〈特集〉）」全国学校図書館協議会（通号506）pp.p19～26 1992/12
- 8 日本教育新聞 文部科学書「読書離れ防止に10の提言」1994、11月19日発行、第4面
- 9 浜田重幸「文化データから見た日本人の読書離れ－100万人の調査から」日本製紙連合会 Vol.50, No.10（通号622）pp. 1～6 2000/10
- 10 森忠繁・千家令子・堂田いづみ「学生の読書に関する調査：一世論調査との比較」近畿福祉大学紀要 Vol. 7,

高田短期大学紀要第27号

No.2 pp.151-158 2006/12

- 11 時事通信 Jiji Top Confidential pp.15 2007/04/20
- 12 浅井昭治「子どもはどうやって本を読まなくなったのか(特集 読書離れにいどむ)」教育と医学慶應義塾大学出版会 Vol.56, No.1 (通号655) pp.20~26 2008/01
- 13 向井睦子「読書離れの中学生に働きかける—大阪市立大淀中学校」全国学校図書館協議会(通号494) pp.p63~65 1991/12
- 14 三富ゆりこ「読書時間を設けて読書の習慣化を図る(読書離れに打つ手はないか<特集>)-(読書離れ対策)」全国学校図書館協議会(通号499) pp.p32~34 1992/05
- 15 作山静男「子どもの読書離れを防ぐには—読書指導(新しく図書館係になったあなたに<特集>)」全国学校図書館協議会(通号450) pp.p47~49 1988/04
- 16 杉本幹夫「心の時代に向けて—これからの日本を考える(43) 青少年の読書離れを防ぐために、印刷業界が積極的にプレゼンを展開」産業新潮 Vol.53, No.5 (通号620) pp.36~39 2004/05
- 17 足立幸子「読書の魅力を伝える技法—リテラチャー・サークル(特集 読書離れにいどむ)」教育と医学 慶應義塾大学出版会 Vol.56, No.1 (通号655) pp.35~41 2008/01
- 18 中野美雅「行動科学の立場から見た図書館離れ・読書離れへの提言」短期大学図書研究 第28号 pp.47~54 2008
- 19 佐藤方哉「ことばと行動：第1章 言語への行動分析的アプローチ」pp.3~22 2004初版4刷

参考文献

- B. F. Skinner "Organism of Behavior," Englewood Cliff. N. J. Prentice Hall Inc., P20, 1938
- 浅野俊夫・訳「オペラント心理学入門—行動分析への道—」サイエンス社、1978 原著：G. S. Reynolds
- "A Primer of Operant Conditioning", Glenview Il. Scott, Foresman And Company. 1975.
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・リチャード・マロット・マリア・マロット「行動分析学入門」産業図書 2007. 03. 28初版第13刷